
狼煙の一戦

白熊筆銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼煙の一戦

【Nコード】

N9132U

【作者名】

白熊筆銀

【あらすじ】

夜の帳を引きずり降ろす、紅い夕暮れ。それは、鮮血の気配をも引き寄せた。血濡れた儀式によって、神殿建造が執り行われる。儀式場から溢れ出た血臭は、獐猛な獣を呼び寄せてしまうのだった。

鮮血への横槍（前書き）

予定だと3部くらいになるかな

ちよつと楽しい。

しかし、これ以上お不戯の時間はない。敵サーヴァントの戦意の高まりを肌を感じる。びりびりと、ひりつくくらいだ。距離をとってなお膨れ上がっている。

間違いなく強敵だ、並の英霊ではない。ライダー 騎兵の英霊の強みが何一つ使えない、ステータスも軒並み低下している、今のライダーが事を構えるにはあまりにも不安要素が痛すぎた。

勝ち目はない、と。 散々喚いて息切れした慎二に理解してもらつ。

「シンジ、2人の強者の内、必殺技が使える方と使えない方、どちらが勝ちますか？」

「っ……そ、そん、なのお……っ。っ、つかえる、ほうに、決まっ
て。……はあっ……。きまつてる、じゃない……か」

「はい、使える方が勝つでしょう。」

では、現状はこれに当てはまる、と思いませんか？」

「ゼ、エ……ど、どこが」

「魔力が不十分なゆえ、私は宝具を使えません。サーヴァントをサーヴァントたらしめる必殺を使用できないのです」

「……、……」

「対して、あの敵のサーヴァントは？ 私と同じく、宝具を使おう

にも魔力が不十分で、宝具を使いたくとも使えない、と思いますか？」

慎二が顔を伏せる。ギシリと、歯軋りが零れた。

「……ボクが、解るか。」

どうなんだ、アイツの、魔力。ライダー、お前から観て」

「魔力が滾っている気配すらありました。宝具を使用できるのは確実でしょう」

淡々とした即答に肩を震わせて、俯いたまま慎二はふらふら立ち上がる。

学園の外に足を向ける。

「……ライダー、足止めしろ。ボクは、その間に逃げる。全力でアイツを足止めしろ」

「承知しました」

「！……ライダー、お前……！」

予想外の了承に、慎二は驚愕して振り返った。

反論があると思った。以前ライダーがうるさく言っていたように、

敵のサーヴァントが来たらすぐさま逃げればこんな事態にならなかったのではないか。こんな、負けを待つしかない、絶望的な状況にはならなかったのではないか。もっともっと街の人間を襲って、もっともっと魔力を蓄えておけば勝ち目はあったのではないか。

いや、そもそも自分が魔術師ならば、真っ向から立ち向かえたのではないか。

魔術師でない自分にだって考えられる可能性を、ライダーが考えられないはずがない。ならばなぜ、理不尽な命令に文句の一つも出さない、イヤな顔一つしない、嫌味一つ吐こうとしない！

「反論などありえません。」

偽りと言えど貴方は我が主。命令は従順に遂行します。それが、貴方の望みなのでしょう？」

「……………そうかよ……………」

つまりはそういうことだった。

ライダーにとって、偽りと言えども、慎二は主。主の命令を絶対遵守するのが自分なのだ。ライダーは慎二の言った通りにしているだけで、慎二のためではないと言い切った。

“ ……そうか、そうだよな。ああ、お前もどうせ……………”

慎二はもう何も言おうとせずに、学園の外へ向かって駆けだした。向かう先は自宅である間桐邸。ライダーは、堅牢な結果が困うあの屋敷に、慎二が逃げ込むまでが戦いだと判断する。

慎二が逃げ込めば、あとは事態を察した憎々しいあの老獪がなに

かしらの取りなしをしてくれるだろう。ライダーが退くのはその時だ。

それまでの間、この地形を、ライダーに有利なこの障害物だらけの場所で足止めする。

もっとも、学園裏に逃げ込んだのは、ただ林に紛れて時間を稼ぐためだけではないし、有利な場所だから足止めも容易と踏んだわけでもない。

なによりもライダーは、勝ち目はないと言ったものの、逃げるしかないと言ったものの、しかし、負けるつもりなど微塵も無かった。

かつて、化け物、と恐れられた。化け物、と襲われた。化け物、と罵られた。

数え切れないくらい多くの英雄達に狙われて、同じくらいの、数え切れないくらい多くの屍の山を築き上げた。

「サーヴァント、貴様がどこの英雄かは知らない。ですが、私からすれば所詮、獲物の一匹に過ぎないと教えて差し上げましょう」

負けを知らずに老いて死んだのならば、初めての敗北を味わうと良い。

遠方の、人型の熱源に向けて語りかけると。ライダーはくすりと妖艶に微笑み、どこからともなく鎖の付いた杭のような短刀を取り出した。

眼帯越しに暗闇を見詰めつつ、林の暗がりの中に、身を溶かすよ

うにして隠れ潜む。

さながら獲物を狙う蛇のごとく。狩場に足を踏み入れた者に、密かに牙を向けるのだった。

鮮血への横槍

夕暮れに染まる街。次第に、夜闇に染められていく。

ここ最近、冬木市では怪事件が多発し、つい先日などは猟奇殺人が発生していた。

深山町に学門を開ける穂群原学園はコレを受け、安全策の一環として、生徒達に放課後になれば早期帰宅を促している。

校舎内には、学生達が下校し、僅かの教職員と警備員が残るばかりとなった。

しかし、校舎の屋上に1人の男子生徒がいることを、学園関係者は誰も知らない。ましてやここ最近起きている怪事件、首筋に奇妙な傷を残した意識不明者が多数発見されている事件が、彼の差し金によるものとは及びもつかない事だろう。

それは、いま彼が行っている非道についても同じこと。

彼の名は間桐慎二。穂群原学園の学生だ。未だ学生服姿のまま、

慎二は屋上をぐるりと見渡して、貯水槽に目を止める。喜悦に歪む眉目秀麗な顔立ちを醜悪に濁らせ、ゆっくりと歩み寄る。

「ここら辺がいいな。やっぱり、シヨールは最高の特等席で見なきやね。」

「おい！ なにモタついてんだよ。早く仕事に取り掛かれ、ライダー！」

慎二は目前の貯水槽を見上げて暗い笑いを浮かべたが。しかしさして間を置かず、ふと不機嫌な声をあげる。誰もいない空間に、苛立たしげに怒鳴る。

傍から見れば、異常者にしか見てとれない奇異行動。誰もいない空間を、あたかも何かがいるかのように怒鳴りつけている。

「……………シンジ。ここでは目立ち過ぎます。結界の基点を仕掛けるなら、もっと人目に着かない場所が適している」

しかし、応じる声があった。

虚空から滲むように、最初からそこにいたように、長い髪の女性が現れる。

透き通る艶やかな美声で慎二に意見を出す、『ライダー』と呼ばれた女性。

ライダーは、目が眩むくらい抜群のスタイルを押し出す大胆な黒のボディースーツに包み、両目には如何にも頑丈そうな眼帯を付けた、あまりにも奇抜で変質極まる恰好。しかし、ライダー本人の醸

し出す妖しく妖艶な気配が、どこか畏怖を覚えさせる神性な雰囲気
が、変質的な服装にまるで違和感を感じさせない。

この怪しさ極まる服装こそがライダーらしいものなのだと、どこ
ぞの神々しく美しく愛らしくライダーにとって最も恐ろしい可憐な
少女ら2人による、天啓がなされているようでもあった。

「目を紛らわせる物もない。見つけて下さいと言っようなもので

「おいおいライダー。お前さあ、ボクのサーヴァントのくせに、マ
スターに意見するってのか？」

このボクのサーヴァントなら、黙って仕事にとりかかれ」

「……………承知しました」

ライダーの意見に慎二は耳一つ貸さない。それどころか、手帳の
ような怪しげな本を片手に高圧的な命令口調で、侮蔑の表情でライ
ダーを貶し出す。

だが、ライダーは慎二に文句一つ言わない。ただ押し黙って、貯
水槽を上にした壁に両手をついた。

「まったく、最初からとつと動けよ。というかここで何個目の基
点だと思ってるんだよ、何か所まわって、何回同じこと繰り返してる
と思ってるんだよ？ 23回目だけ。わざわざ言われなかったって自
分から動けるだろうが。」

ホントにさあ、ライダー。お前、あいつに似てトロいんだよ。イ
ライラするんだよ。このノロマのデカ女が！

なんだってこのボクが、こんな放課後遅くまで学校に残んなきゃいけない訳？ どうかの正義バカじゃあるまいし……。どうしてこんな時間までいなきゃならなかったか、……。分かる？ 愚図な、お前が、のろのろと、トロイせいだ！」

グチグチグチグチ愚痴を続け、ライダーを貶し続ける慎二。でも、ライダーは何も言わない。ただ黙って壁に手をつけているだけだ。慎二もどれだけ嫌味を吐きかけようと、なんら反応も寄越さないライダーに白けたか、大きく舌打ちするのを最後に爪を噛んだ。

どうにも今日の慎二はご機嫌斜めだった。それというのも、慎二が熱を上げている学校一の優等生が、珍しいことに、学校を無断欠席したのが原因である。ライダーにはいいとばかりだった。

「完了しました」

「ああ？ はっ。ようやくかよお、待ちくたびれちゃったなあ」

「申し訳ありません」

「もうし訳ありません、としか言うことないのかあ。あーあーあー、ライダーはマジで出来の悪いサーヴァントだなあ？
ふん。まあ、とっとと帰りたいし、今はもういいけどさ」

「……………」

無言が人型になったように沈黙したライダーを押しつけ、慎二は

出来あがった仕掛けを上から下まで舐めるように眺めた。

壁には大きく、ライダーが手を着くまではなかった、怪しげな紋様が描かれていた。

「はは、完璧だな。さすがはボクだ」

「……………」

3つの円形と2つの正方形とが組み合わさり、幾つもの太い血管のような線が木の根っこの如く中央の円形に向かって伸び、中央に置かれた心臓のような球体を取り囲むかのような構図。

コレ自体が放つ毒々しい燐光や禍々しい気配は、常人ならば吐き気を催すことだろう。

コレは魔方陣だ。ライダーの持つ、「他者封印・鮮血神殿」ブラッドフォート アンドロメダという結界型宝具の準備段階に置かれ、結界の基点となる魔方陣。

現在は仕掛けたばかりで然程の力もない。だがこれから時間がたてば、他に仕掛けた魔方陣同士が繋がり合い、巨大な結界を形成する基点となる。ちなみにその構成を慎二が理解できる訳はなく、完璧だとかいう発言はただの知ったかぶりであった。

この宝具の目的と効力は、ブラッドフォート結界内部の人間を溶解し、その生き血と魂とを魔力に還元しライダーが吸収するという悪辣極まりないものだ。

「こいつがしっかりと起動してくれたら、魔術師じゃないボクにだって、十二分に勝ち目ができるのか……………！」

間桐慎二は魔術師ではない。ライダーは慎二自身が召喚した従者サーヴァントではない。

サーヴァント、つまり英霊は、元を正せば霊体。ライダーを実体化させることは、魔術師でもない慎二には、独力で出来なかった。どうしても魔力が必要だった。

魔力とは生命エネルギーを変換したものであり、魔術師ならば体内に備えているという魔術回路を以て生成できた。

ならばと、魔術回路を持たない魔術師足り得ない慎二は、得体の知れぬ祖父の教えに従った。何百年と生きる怪老の教えは、街中で人を襲い、精気をライダーに吸い取らせるといふものである。

魔力の源は生命力だ。ゆえに、人間の精気を吸い取らせればいい。慎二は試しにとライダーに実行させてみれば、案外と楽しかったことに気を良くした。

魔術は秘匿するもの。だからなるべく人目につかないことが絶対条件であり、人を襲う作業は挑発して路地裏に誘い込むなどこそこそとしたものにはなっただが。

悲鳴を上げて逃げ惑う一般人を追い詰め、恐怖に歪む表情で許しを請う様は、実に愉快で愉快で堪らなかつた。調子に乗って、夜な夜な何人も何人も襲うのも仕方ないし、女の心地よい懇願や泣き声を狙うのも仕方がない。自分にとっては楽しく気分良く、そして彼女等にとっては自分の力の糧になれるのだから幸せというものだろう。

そうして。どうにかライダーを維持しているのが慎二の実情だっ

た。

だがこの結界が完全に発動すれば、結界内部にいる何百人分もの精気を得ることが出来る。膨大な命が精気に還元された、計り知れない力の塊を、ライダーに与えることができるのだ。

実現すれば、わざわざ影に隠れて精気を蒐集する必要がなくなる。それどころか、他の6騎のサーヴァントなど赤子の手を捻るように駆逐できる力を得られるのだ。

ライダーを自分の力として見ている慎二は、目の前でうつすらと壁に溶け込むようにして隠れていく魔方陣に、顔見知りの正義バカや学園一の優等生が、誰もが自分に跪く情景を夢想する。

慎二の濁った笑みに、恍惚とした色が混沌と合わさった。

「……………シンジ」

そんな慎二の妄想など知る由もないライダーは、「くくく、くくくくはは」などという酷く気味の悪い笑い声から耳を塞ぎたくて仕方なかった、

「ん？ ああ、そうだなライダー。もうこんなところに用もないしさっさと」

その気配に気が付くまでは。

「敵です」

「帰ると、つてええっ!？」

敵のサーヴァントが急接近していた。

ライダーは敵のサーヴァントを察知する能力がそう高くない。本来のマスターと契約できていない現状ではなおさら、気配察知も含め多くの能力値が軒並み下がった状態なのだ。

ブリットフォート
宝具の力を発揮できていればともかく、現在のライダーに敵のサーヴァントを打倒する力はない。

ゆえに、敵サーヴァントの気配を感じたらすぐさま逃げる。大変な屈辱だが、力がないのでは仕方がない。慎二もそのことはライダーから、途轍もなく根気強く、説明を受け承知していた。

「なんでもつと早く……いや、いやいや、いいじゃない。丁度いいじゃないか」

「は？」

サーヴァントとは過去に生きた英雄だ。

生前に数々の英雄達に狙われたライダーだからこそ、カモなしに敵のサーヴァントに挑むのは無様な敗北に至るだけだと理解していた。

「ライダー、いまここに来るのはお前と同じサーヴァントなんだから」

？ だつたら簡単だ。なにも逃げることはないじゃないか」

とても、ライダーはとても嫌な予感がした。

「……………なにか妙案があるのでしょいか」

「ああ、当然だとも！

お前がソイツを倒せばいいんだ、ライダー」

「……………」

ライダーは反応を顕わにせず、嘆いた。心の中で、深く深く嘆いた。

敵の力を理解しているからこそ、聖杯戦争において、敗北は死に直結すると解っている。だからこそ、ライダーは根強く慎二を説得したのだ。本来のマスターを悲しませないように、と。

プラットフォーム
宝具完成前は、敵と遭遇しても逃げるしかない、たとえ挑んでも易々とやられるだけだ、と。何度も何度も説得した、繰り返しすること幾度にも及ぶ数、説得したのだ。

なのに！ 憎らしいほど爽やかな慎二のこの楽観ぶり！

もはや神のイタズラとしか思えないほど慎二は、ライダーの涙なしには語れない説得劇などこれっぽっちも耳に入れてなかった。

哀れライダーは、どうしようもない慎二の余りのどうしようもなさに、深い衝撃を受けて呆然と立ち尽くしたのであった。

漠然と、ライダーは想像する。

たとえこの場を切り抜けたとしても、今後に待っているのは生前に匹敵しかねない日々だ、苦労苦難苦渋の日々だ、と。

いつそヤラレテしまおうかと思っただのはライダーの内心だけの話。

ライダーは諦めた。慎二を説得するなどおよそ不可能だ。それに、本当の事情からも逃走は諦めざるを得なかった。

「よお、夜にこんなところでこそそと何……おおっ……。 はは、こいつはたまげた美女じゃねえか！」

なあ、夜分に何してるか知らねえが、暇してんだろ？ オレもなんだ。そこで、イイ暇つぶしを紹介するぜ」

屋上を囲うフェンスに、ひょうひょうと、音もなくその男は降り立った。

月光に照らされたしなやかな体躯を、動きを阻害しないよう体にピタリと張り付くような、青いボディースーツに包んでいる。ライダーと慎二という獲物を見定めるように紅い目を細めて見詰める男は、体つきと相まって豹を思わせる獰猛な気配を漂わせている。

戯けたことをぬかして、ニヤニヤと笑っているが、走力に自信のあるライダーに逃走を断念させるほどの足を持っている。

気配が察知できる距離まで接敵された時、男もライダーを察知したのだらう、凄まじい速度に加速された。

逃げても無駄だと訴えるような急加速にライダーは、その瞬間に、逃走は不可能だと悟っていたのだ。

「ああ、何だよお前？　ボクさ、お前みたいに心が軽そうなやつ嫌いなんだよね。とくに、このボクを無視するヤツは特別に大嫌いだ」

並々ならぬ強敵の予感。それは、登場した時から発せられている殺気のせいで確信へと近付いており。ライダーの中でもはや想像以上にできる敵だと悪寒が強まっている　というのに。

「へえ。言うじゃねえか、小僧。お前さんがその気なら、おあつらえ向きだろう。そら、そっちのべっぴんさんも、ツレねえ態度はヤメにしろ。マスターはやる気だそうだぜ？」

「サーヴァント。私は彼に一言あります、しばしお待ちを」

「あ？　ボクに？」

「ん？　応。いいとも。」

女の準備が整うまで待つくらい、どってこたあない。いくらでも付き合っぜ」

「感謝します。　シンジ」

気の良い返事を返してくれる敵のサーヴァントに、なぜかライダーの心は小躍りした。ここ数日、まるで会話相手がいなかったせいであった。

ライダーはまるで会話相手にならない慎二の前に立つ。ひどくげ

んなりした。

慎二はいやに迫力が滲み出ているライダーに常の調子で突っかかることができず、「な、なんだよ」とおどおど言い、小さく一歩後ずさりする。

「場所を変えます」

意味が分からないと、慎二が呆けた顔をする間も与えず。ライダーは慎二を抱えて、貯水槽の上に軽々と跳躍した。

「んなあ！？ まま、ままでライ、だーあああああーっ！
！」

間髪入れず、次の動作もまた流れるようになしていく。
テキトーに抱えた慎二と共に、一息で、ライダーは再度高々と跳躍すると、学園裏を指すようにして屋上を去っていった。

瞬く間に行われた一連の流れを、男はただただ驚いて目で追うだけだった。

聖杯戦争に参加する英霊とは己のような存在だと思っていた。戦うことに生きる意義を見出したような、戦好きの連中の集まりだろうと。そうでもなければ、英雄と呼ばれるほどに戦い続けて、人を殺し続けることなどなかったはずだ。

例外こそいるだろうが、しかし聖杯戦争と呼ばれるこんな戦いに

戦嫌いが喚ばれるなど想像できない。だからこそあの女も、逃げようとせず、ここで待ち構えたのだろうと思っていた。戦うことが好きな自分と同じ、好戦的な輩だから召喚に応じた、そんな存在だとばかり思っていたのだ。

ところがこれである。

作戦でも練るのかとのんびり構えていたら物の見事に意表を突かれた。いやはや、攻撃や罠の類は警戒していたが、こうも突拍子もなく潔く逃げられるといっそ清々しさすら感じられる。

「ま、そう簡単に逃がしやしねえけどな」

さして遠くには逃げていない。同じサーヴァントだからこそ、男はその気配がまだ学園内に感じられた。

男は獰猛な笑みを浮かべると空手をひと振りする。途端、低く唸るように、ねばつくような風が吹く。

余韻を残しつつ風が消えた後には、男は長くて紅い棒のような物を手にしていた。血塗られたかの如く紅い棒を、手慣れた様子で携えていた。

一瞬のことだ。男は屋上から、遠のくライダーの気配を目指して、消えるようにして音もなく跳び去った。

夜陰の奇術

夜陰の奇術

相棒たる紅い槍を片手に、槍兵^{ランサー}が林に降り立つ。

暗がりの広がる林。奥に感じるのは、屋上から、少年を抱えて跳んでいった敵のサーヴァントの気配。『ライダー』の気配。

少年の酷く情けない叫び声から、あの女サーヴァントは騎兵^{ライダー}の英^{サーヴァ}霊^{アント}であると、ランサーは察していた。

『サーヴァント、貴方がどこの英雄かは知らない。ですが、私からすれば所詮、獲物の一匹に過ぎないと教えて差し上げましょう』

乾いた風に乗って、透き通るような声が通り抜けていく。ほう、とランサーは目を細めた。

ライダーはどうやら暗視の類ができるらしい。闇夜に包まれ、林が乱立しているというのに、遠く離れたランサーの位置を把握しているようだ。

騎兵相手ではまともな勝負を期待できそうにない。少しばかり落胆していたランサーは、けれどもおもしろそうな戦いができると気を持ち直した。そして、ライダーの気配がまるで暗殺者アサシンのように失せたことに、気を引き締める。

鳥の鳴き声が消えている。気配こそないが、おどろおどろしい気が立ち込めていた。鳥達も、ランサーもまた感じ取っていたのだ。ライダーのサーヴァントの、禍々しい殺気の強まりを。

「フッ！」

耳障りな金属音が辺りに響く。夜陰に乗じて飛来した、背後からの殺気の塊をランサーは持っていた槍で弾いた。

「短刀……？ いや、杭か」

弾いたものは、後方に長い長い鎖の付いた、尖端が鋭利な杭のような短刀ダガー。

月に照らされて銀色に映る杭。長い長い鎖と共に、上へ上へと吸い込まれるようにして消えていく。

杭の消える方向に目を凝らしたランサーは、艶やかな紫色が流れるようにして闇に垂れているのを捕えて目を疑う。

ライダーが垂直に、木の枝に逆さまに立っている。長い鎖を束ね持ち、手繰り寄せた杭を構える彼女は、まるで牙を向ける蛇を思わせた。

「フフ……」

ランサーの驚きの視線を受けて、ライダーは軽く微笑むと再び夜陰に姿を溶かす。

すると、ライダーの気配はさらに希薄になった。

「……！ チイツ」

格段に速さを増した杭が不可思議な角度から、ランサーに襲いかかった。

鋭く風を貫く杭が、まるで一筋の線のように映る速度で、ランサーを足元から襲う。槍で払えば、先ほどよりも大きな衝撃音が辺りを打つ。

さらに、杭が戻る速度もまた格段に増していた。

杭は夜闇に消えると、再度、何度も、繰り返し、一切予測できないタイミングで、まるで違う方向から鋭くランサーに襲いかかる。時に正面から、死角から、木々の合間から、枝の隙間から。あらゆる方向から、上下左右から、ランサーを中心にした180度全ての角度から襲いかかる。

木偶ならば瞬く間に穴だらけになり、ついには破片となって砕けたことだろう。しかし相手は、並々ならぬ猛者だった。

致命に足るであろう杭は、全て、一度たりともランサーの体に突き刺さることはない。

「ア、サ、シ、ン、か、つて、え、の、つと」

全て弾かれるからだ。まるで見えない壁があるかのように、一撃たりとも杭はランサーに届かない。掠り傷一つつけることもできない。

ランサーも初めは舌を打つなど不慣れな様子を見せていたが、次第に、動じることもなくなっていた。

見えない場所からの攻撃だが、風を裂く音までは隠せない。鎖が零す独特の音も隠せない。

確かに速い。確かに戦い辛い。並の者なら早々に急所を貫かれたことだろう。

だが、決して英雄に通じるモノではない。

「止めな」

首筋を狙った杭を、僅かに首を傾げるだけで避ける。目と鼻の先を通り抜けた杭を素手で豪打して叩き落とした。

怒気を顕わに、ランサーは魔力を漲らせている。

あれだけの大口を叩いておいて、この程度の芸当しかできない。ランサーはライダーに失望していた。

「コレ以上、こんなちやちなマネを繰り返すんなら、ここいら一帯を薙ぎ払ってでも貴様を探り出す。つかしな、さすがにそんな大音

を立てちまえば、聖杯戦争の基本中の基本、秘密裏が通せない。貴様はどうだか知らんが、オレのマスターは秘密裏に拘ってるんでな、さすがにそこまではできねえ。

でもよ、いつまでもこうチマチマと千日手を繰り返すくらいなら、オレもマスターの方針に逆らわざるを得なくなる。だから、ここで退く。

まあ。もしもまた戦いたいなら、後日、夜にでもここに来な。

その時は　その小せえ心臓を貰ってやる」

吐き捨てるように言って踵を返す。もはやライダーと戦う気は毛ほども無く、宣告通りに帰るつもりだった。

「戯けが……」

既に聞き慣れた、癩に障る鎖の音が後方から響く。

急速に迫る音は、ランサーからすれば、ライダーの怒りと焦りを孕んだようにすら思えて。失望を越えて呆れが浮かんだ。根絶丁寧に説明してやったのに、見逃してやったのも分からないのか、と。

振り返る最中。ランサーは、視界の端にライダーの姿を捉えて、あまりの愚策に失笑した。ライダー自らランサーに突撃してくるのだ。その速度は杭と比べるまでもなく鈍い。

何を思っの突撃なのか、ランサーは考えることもバカバカしく、胡乱気なままライダーの左胸に照準を定める。

狙うは一撃必殺の刺突。槍の間合いに飛び込んだが最期、心臓を一撃で貫いてやろうと、ランサーはライダーを待ち構えた。

それは数瞬の出来事だった。

「が、ハッ!？」

ランサーは、訳が分からなかった。いきなり世界が回ったと思えば背中から強かな衝撃を与えられたのだ。

ライダーがほぼ眼前に接近した刹那、ランサーは中空に紅い線を描くが如く、槍を奔らせた。ライダーの心臓に奔った紅い線は吸い込まれるようにして、何も無い中空を滑り抜ける。

呆けたランサーは、中空で前転したライダーに槍が避けられたと気付けない。呆然と弛緩した顎の両脇を、ナニカに挟まれてようやくハッと気を取り直して、体が持ち上げられたことに目を見張った時には体が宙に浮いていて、世界が回っていて　それは数瞬の出来事だった。

数瞬で、ライダーは、ランサーを両足で放り投げたのである。

ぐるぐるぐると高速で回転しながら投げられたランサーが死に至らなかつたのは、単に英霊だったからだ。これがただの人間であったならば、空中を高速できりもみ回転しながら、五体を、臓腑をバラバラに撒き散らしたことだろう。

「や、つてくれる……!」

だが、それだけではない。

事態を把握し、事実を正確に理解したランサーは齒噛みした。10メートルと離れた場所で、悠然と、見下すように微笑むライダーを睨みつける。

生きながらえたものの中々の痛手を負った。さすがに二度も同じ手を食らう気はないが、次に食らえばその時は首が付いているか分からない。

だから、そういうことなのだろう。

ランサーはナメられた。首が離れないように加減して放られた。殺せたのに殺されなかった。

つまりライダーは、痛ぶって殺すことを望んでいるのだ。生き長らえた最も理由はライダーが手心を加えたからだと判断したのち、ランサーは燃え滾るような憤りを覚えた。

「クス……まったく無様ね、ランサー。」

先ほどの口上をほざいた者とは、まるで別人のよう」

けれども。ライダーは、ランサーの読みとはまるで違い、臍を噛む思いでいた。

杭を幾多も投げつけて、ランサーの余裕を誘い油断を誘い、慢心を生み出した。ライダーは敵足り得ない、不意打ちしか能のない敵だと思いきませた。

そして、慢心が態度に表れた瞬間を狙い定めて強襲し、獲物をくびり殺す。

それがライダーの描いていたシナリオ。

夜陰に乗じて単調な攻撃を繰り返したのは、全ては最後の必殺の

ため。脆弱な体でできる、脆弱な体だからこそできた奇策だった。

予定調和は、先の一撃は、完璧だった。けれど、ランサーの首はまだ付いている。

ふらりと立ち上がったものの、ランサーは足元の地をしつかりと踏み締めているし、視点も定まっている。安易に追撃を仕掛ければ、容易くあの紅い槍で貫かれたことが窺えた。

全力で投げられなかった。万全の状態に程遠いライダーでは、完璧に投げることはできても、完全に仕留めるには至れなかったのだ。奇策にあてらった脆弱な体がこの上なく惨めだった。

現状できる唯一の、必殺を為し得る絶好の機会を逃した。

「さて、行きますよランサー。」

『小さい心臓』などと私を見下げたことを悔い、過去の己を呪いなさい」

ならば、再び機会を作るまで。

手応えはあった。ランサーには確実にダメージが溜まっている。弱っている。回復される前に攻め続け、いずれ落とす。

慎二が間桐邸に着くまではまだかかるのだから。それまでは、ランサーを足止めする必要がある。ライダーはランサー目掛けて疾駆した。

怒りに震えるランサーは、己に迫る速度で追撃を掛けてくるライダーを、迎え討とうと槍を構えた。

ダメージは深く、まだ思うように体を動かせない、下手を打てば

敗北を喫する、危機的な状況だ。

だが、そんな状況に立たされている現状に、……分の悪い戦況にふと、ランサーはニヤリと笑った。ああこれだ、と。

脆弱な気配しかなかったライダーは、臆病者としか思えなかったライダーは、その実頭の回る敵だった。あわや必殺を決められるかと危惧するほどの、難敵だった。

これだ、と。微かにランサーは喉を震わせた。欲していた戦場がここにある。ギリギリの命の削り合いがここにはある。

互いに互いを如何にして攻め、攻め手を如何にして防ぎ、防御を如何にして抜き、如何にして追い詰めて、勝利するのか、殺すのか。殺意の元、敵と己の思慮思惑が混ざり合い、眩暈がするくらいの質量を持った殺気が交差する、痺れるような感覚。

これを味わいたかったから召喚に応じたのだ。戦っているのだ。

生前、数え切れないくらい屍の山を築き、血の河を流し、骸を炎に包んできた。

だが幾千を超える戦いの内、殺し殺されるくらい実力の伯仲した殺し合いは、数えるほどしかなかった。フェルディア親友もそうだし、息子もまたそうだったが、彼らのように全力を賭してまで殺した猛者など、殺してきた万を超える兵のなかにも28人の怪物にもいかなかった。クランカラティン結局のところ、片手の指にすら足りていない。

ゆえにランサーは歓喜していた。初戦にして、これほどの猛者と矛を交えられた幸運を、聖杯戦争に招かれたことを。

オレの願いは叶っているぞ、と。“全力の殺し合い”を望んだ己を召喚してくれたマスターに深く感謝した。

怒りの表情を子供のような笑みに変えたランサーを大いに訝りながらも、ライダーは迷うことなく接敵した。ジャラリと、両の手を微かに動かしながら、駆けた。周囲の空間を網羅しながら、身を投じた。

「な、に……ッ？」

ランサーは驚く。駆け寄ってきたライダーが、無手の両の手を微かに動かした途端、宙に浮かんだのである。

魔力が動いた気配はない、宝具や魔術の類ではない。ならば、タネのある奇術であろうか。

空中に浮いたライダーは、困惑するランサーをさらに驚かせる。浮かんだ体勢から、さらに複雑怪奇な軌道を描いたのだ。

唐突に急上昇したかと思えば急下降しつつ急旋回。中心にランサーを置いて高速で螺旋を描いたかと思えば、今度は鋭く切り込むように斜めに、目まぐるしく宙を動き回る。

だがそこは、ランサーの槍の間合いの中だ。動きこそ読み切れないが、目にも止まらないという程ではない。

残影に囚われぬよう、動きまわるライダーに刺突を放つ。

「フフ」

しかし、槍は当たらない。

槍を突く、その瞬間にライダーは槍の間合いから離れる。そして、再び動きまわりながらじわじわとランサーとの距離を詰める。

その繰り返し。

けれども。

ランサーは諦めない。槍でライダーを突き、また突きを放つ。連続で突きながら、瞬間毎に距離を詰める。

小刻みに踏みこみ、追いかけるようにして槍で突き、払い、断続的に攻め続けた。

されど槍は、縦横無尽に空を舞うライダーに届かない。

ランサーにはかつて、戦乱の最中、仲間たちと狩りに明け暮れる日々もあったが。されど、これほど予測のつかない軌道を空中で、それも高速で描く獲物などいなかった。

経験に無い対象を相手に、ひたすらに槍を突き出し、虚しく空振るだけ。はたして、この状況をどう打開したものか……

空を貫く槍が50を超えて。ついに、ライダーは攻め手を打った。ライダーが大きく距離をとる。その手から、いつの間にか握っていた杭をランサーの眼前に向けて投げ放つ。

投げ放たれた杭は鋼にすら突き立つ勢いだ。が、そんなものは今更。ランサーは杭を放つことに疑問符を表情に浮かべるも、それを何の苦もなく槍で弾いて。

ライダーの気配を左側面に感じて肌が粟立った。

そこは、槍を振るったことにより生まれた死角。

ライダーはランサーが槍で杭を払う最中、素早く宙に弧を描き、生まれたその死角に滑り込んでいた。

「ぐ、ッ……！」

遠心力の付いた強烈な蹴りの一撃。ランサーの脇腹にライダーの両足が深々と突き刺さる。

してやったり。苦悶の声を上げさせたことにライダーは嗤い、ランサーがバキツと地面を砕いて踏み止まった音に、耐え抜いた証に、戦慄した。

ライダーはただ遠心力をつけた蹴りを放ったのではなく、時間の制限はあれど、力を何倍にも上げる妙技を用いていた。それこそ、大木を蹴ったなら蹴った所からへし折り、根元から別たれた木が宙を舞うだろう威力を込めて、会心の一撃を叩き込んだのだ。

ライダーは肋骨を粉碎し、臓腑にまで達した感覚をしかと、つま先に捉えていた。

それでも。ランサーにとってはたかが蹴りだった、たかが蹴りの一発だった。

それならばその程度。

蹴りの一撃で怯んでいたら、そんな無様を晒していたら、彼は英雄と呼ばれなかった。彼は英雄を自称しなかった。己が生涯を飾る誇りとしなかった。

「……………」

齒軋りを残し、後退していく美麗な紫影。後を追うように、ランサーは追撃の槍を掛けた。

一撃を受けたにも拘らず、揺るぎなく、むしろ更なる冴えを見せて、紅い旋風が吹く。が、すぐさま下がった影には届かず、虚空を

薙ぎ飛ばすに終わる。

しかし旋風は止まらない。

さらにさらにさらにさらにと、疾風怒濤と、紅い槍が振るわれる。

「オオオオオオオオ

ッ！！」

痛打を受けてなお戦意に全くの衰えを見せず、ランサーは視界を覆わんばかりの紅い暴風となり、かつてライダーも聞いたことのない苛烈な雄たけびを上げた。

ライダーには届かないまでも、鬼気迫る勢いで大気を穿ち切り裂き、真紅の槍が振るわれる。周囲はただの余波で切り刻まれ、挟まれ、竜巻が吹き荒れたような痕を刻んでいく。上昇する暇を一切与えない。ただただ後退を余儀なくさせる、紅い連舞で以て攻め立てる。

避けることしかできない連撃を、だがライダーは蟲の足掻きと受け取っていた。彼女からすれば必殺足り得る手応えを得ていたのだから、ランサーの猛功は風前の灯のような一時のものだと捉えていたのだ。

「く、っ、う、……ッ！」

しかし、100を超えてなお加速する連続の刺突。変わることもなく、むしろさらにさらにと、繰り出される度に速くなっていく、狙いが明瞭さを増していく、殺意が吹き荒れていく紅い槍。それはもはや、数という概念を逸脱していくようだった。

生前にもなかった凄絶な攻勢。生前ならば、それを捌く手札を、膨大な魔力で切ることができた。けれど、今のライダーには不可能である。

現状で捌き切るしかない攻防に、ほんの僅かだが、ライダーは理不尽を覚え、諦めが脳裏に掠めた。それは砂一粒ほどの、極小の隙。緻密な駆け引きが要求される殺し合いにおいて、そんな隙は命取りとなる。

なぜならばそれはつまり　ライダーは一瞬怯んだということであり、全身の筋肉の緊張を一瞬緩めて、絶妙に保っていたバランスを崩してしまったということ。

その一瞬、ライダーの手繰る両の手は、精密な力を歪めてしまった。

それがきつかけだった。

「　　ッ!？」

「　　む　　」

虚空に奔った紅い槍は、
据えた。

ギインツと、不意にナニカを打ち

開幕前夜の消化不良

「ツ、う!？」

何も無い暗がりの中空。しかしランサーの矛先が僅かな手ごたえをそこに捉える。と、ライダーは空中でバランスを崩した。

疑問を差し置いて、間髪入れず槍が動く。

風を穿つ3の刺突。穿った風を、逆巻き、巻き込み、狙った獲物を捻子切らんと放たれた。

乱気の奔流を伴う紅い槍は、眉間、鳩尾、丹田を貫く軌道を高速で奔る。

ライダーはそれら3撃に対し、空の両の手を動かし対処する。金属音を打ち鳴らして両の手のナニ力で2撃を弾き、3撃目を紅い乱気流が掠めていく中、辛うじて避けた。

浅い切り傷から血片を散らしつつ、素早く大きく、ランサー曰くの奇術を用いて、飛ぶようにして後退する。

「ラアアッ!」

その軌道をなぞる蒼い獣。

刹那の間も開けず、ランサーは追撃した。遙か後方へと飛翔する

ライダーに、獲物目がける獣の如く飛びかかり、逃さんとばかりに紅い牙の先を向ける。

ライダーは苦しい体勢で辛くも刺突きよを避け、強烈な衝撃に木を揺らし、深々と突き立った槍をすぐ横目に見て、頬を吊りあげてしまった。 “間” を作ってしまった。

この戦場において、攻防の間際に“間”などない。

他者の追隨許さぬ『速さ』。それこそが彼らの最大の持ち味である。ならば、一瞬であるうと刹那の時であると、あらゆる一時が戦いの最中。

だから。

止まることは許されない。

気を抜くこととて有り得ない。

嘲笑など、致命的な隙を作るも同義。

ゆえに。

「飛べ」

槍を支点に身体を捻ったランサーは、岩をも砕く蹴りを放つ。

音を置き去りにした一撃は、軽々と、ライダーを小石を蹴るが如く蹴り飛ばした。

ライダーは気の緩みを、嘲笑という“間”を晒したのだ。

それは、木の葉が枝から落ちる音のような、そんな無いも同然であるう微細な、微小な一時に過ぎない“間”であった。

されど、その極少の“間”は、致命的な隙に変わりなかった。

遠く彼方にライダーを蹴り飛ばして、やれやれと、ペツと血痰を吐く。そうして一息ついたランサーは、得意げな顔で呟いた。

「間抜けが」

開幕前夜の消化不良

ライダーはかつて、数多の英雄を蹴り殺しにしてきた。

ただ喧々と偉ぶる愚図共に、身の弁え方を、その命を対価に教えてきた。

ライダーにとって英雄とはそんな、簡単に蹴り殺しにできる程度

のモノ。それこそ、その気になれば、虫を踏み潰す如く殺せるモノでしかない。

卓越した力を誇るだけはあるが、達人的な戦術を備えているが、英雄などそれだけだ。

本物の化け物を葬る力など、彼らはまるで持ち合わせていないのだから。

彼らは自力のみで、本物の化け物を葬ることなどできないのだから。

ライダーにとって、敵足り得なかった。

少なくともライダーの知る限り、神々に過保護に扱われ、超一等級の宝具を複数授かりでもない限り、規格外の怪物を相手取るなど不可能であろう、と考えていた。

だが、そんなライダーの非常識じみた常識を、聖杯戦争は容易く覆したのである。

ランサーを蹴り殺した、懦弱な英雄を殺したと、ライダーは確信した。

たとえ魔力が不十分であり、脆弱な力しか扱えないとしても。必殺の手応えを違えるはずがない。命を砕く感覚は、威力は、魂にまで刻んである。幾百、幾千、幾万と数え切れない数の命を粉碎してきたのだから。

ゆえに勘違いなどありえなく、ましてや、耐えられるなど想定外にも程があった。

確信的な致命打を耐え、それどころか反撃に転じ、断続的に連撃を繰り返してきたランサー。

ライダーの必殺足り得る一撃に怯みもしなければ苦悶を上げもしない槍兵は、ただ持ち得る槍で以て、牙え渡る槍術で攻め立てる。

痛みなどないと、効いてなどいないと、槍で語るようにして。

苛烈な雄叫びをあげ、双眸を戦意で輝かせ、息着く間もない攻勢の中。

強く強く、ひたすらにひたすらに、声に、瞳に、槍に乗せられた想いがあった。

“貴様に勝つ” “貴様に勝つ” “貴様に勝つ”

！！

芯を揺らす雄叫びは、貫くような瞳は、終わらぬ槍撃は、一心に勝利を渴望していたがゆえのもの。そのためならば、という意志を感じさせた。

手足の1本や2本、臓腑の1つや2つ、いくらでも犠牲にしよう。対価として、敵の命をとることができるなら、と。

そんな、壮絶なまでに硬い、砕けぬ意志を、猛烈な戦意と共に叩きつけられたのだ。

名誉を欲し、栄華を求めるだけの英雄志望の愚図とは違う。彼らにはなかった、ライダーに翻られ、哀れを誘い許しを請う愚昧な彼らには、まるで感じなかった勝利への渴望。万人の想像を絶する強固な意志。

そこから生まれる覚悟、とめどなく溢れる気迫。

それらは、本物の化け物を打倒した掛け値なしの英傑の証、その片鱗を思わせる輝き。

ライダーにはあまりにも縁遠く、目映い輝きだった。

それに、目が眩んだのだろう。槍が木に突き刺さった、なんて、

敵の、とても失態とはとれない失態に、気を抜いてしまった。

結果、ライダーは無惨にも、地を這うことになったのだ。

シミ一つ見当たらない白い肌には泥が付き、傷が付き。髪は土に薄汚れている。その全身の美しさに汚れが目立った。

間違いなく。その輝きを前にしてライダーが諦めてしまった、怯んでしまった結果だった。

いつまで続くと知れぬ連撃に。あまりにも縁遠い、勇猛果敢な攻めの嵐に怯んだ。

その結果がこの様だった。

「ッ、ッ、……っ、……」

喉元に競り上がる鉄臭い感覚を飲み下し、震える四肢に舌を打つ。その様はまるで自身の抱く想像にある弱者えいゆうのよう。この上なく惨めで。

あまりに、あまりにも屈辱的だった。

ライダーは、並々ならない意地だけで、ふらつきながらも立ちあがった。

確かな一撃だった。がら空きの胸に放たれた蹴りは、吸い込まれるようにして、ライダーの柔らかな脇腹に沈み込むくらい突き刺さったのだから。

けれども。

脇腹を抑えつつ、ライダーは眼帯の下の顔を苦悶に歪めつつも、けれども。歯をくいしばって、土に汚れた身体を持ち上げたのである。

「今のに立ち上がるか……。見た目どおりにイイ足腰してるじゃねえか、ライダー。」

さっきの投げや奇術といい、いまの蹴りといい、まったく中々のものだ」

悔しげに、だが、嬉しげに。立ち上がったライダーを細目で眺めつつ、ランサーは笑った。

数撃。数撃ばかり、有効打を交えただけ。それだけだが、交えたのは両者ともサーヴァントだ。超人同士の攻防は、あらゆる攻撃が致命打であり、神業的な回避の応酬。ゆえに一撃たりともまともに受ければ死に至ることも十二分にあり得る。

だが。なによりも生前、最盛期の自分に芯に来る一撃を与えた存在はいただろうか。殺す気で奔らせた槍から幾百も逃れた敵はいただろうか。

それらを考えるだけで、ランサーの四肢に力が張る。

全力で以て、ライダーを蹴り殺す。蹴り脚で貫く心で、ランサーはライダーに回し蹴りを放っていた。

「なあライダーのサーヴァント」

だからこそランサーは称賛する。

ライダーからの蹴撃のダメージは抜け切らず、また、下らない命令に能力を抑制されているとハンデは大きい。が、そんなもの、殺し合いの戦場において言い訳に過ぎない。

致命の一撃を与えられなかったのは、耐えられたのは、ライダー

の手腕が見事だったからだ。

ランサーは胸中で、ライダーを称賛していた。

「貴様いつたい、どこの『英雄』だ？」

引き抜いた槍を下段に構えつつ、ランサーは問う。

己が望みを叶えてくれる存在は、かつて、どこでどのような無双を誇った英雄なのかと。それを打ち破った時、いかほどの偉業を為し遂げることになるのかと。

体が震えるくらいご立派な偉名ごと、貴様の心臓を貫かせろと。

紅の槍が唸り出す。担い手の意志に触れ、飢えた獣のように餌を、魔力を、周囲から貪り食らう。

そして。

槍から、生き血の如き真紅の光が滲みだす。獣の様相を見せる矛先から荒い息が蒸気と立ち昇り、獲物を欲して低く低く、あかく赤くアカク紅く、唸る、唸る、唸る。

骨まで貪られるように世界が死んでいく。

そんな異様な雰囲気や紅い槍から醸し出し、ランサーは心底から楽しげに、その手に持つ槍のように低く低く、喉を震わす。

獣ケタモの殺意が、じわりじわりと滲み出て、鮮烈なまでに濃くなって。赤々とした秘奥を覗かせながら、獣の唸り声が響く。

「下らない」

「なに？」

戦慄を禁じ得ない宝具の輝き。しかし、それを前にして、ライダーの頭にあるのは「屈辱」の一言であった。

刻々と、ライダーの苛立ちは募る一方だ。

なぜならば、いまの彼女にとって、聞き捨てならない呼称があったからだった。

「『英雄』なんて、名誉を、栄華をと欲し、あまりにも軽く命を奪い、命を捨てる、愚かな生き物の総称……。そんな生き物に狙われ、襲われ続け、殺し続けた私を、そんな下らない獣けだものと同一視されるとは。

大変に屈辱です。ああ、貴方は極めて不愉快だ、ランサーのサーヴァント……」

静かに、耳に残る音が、鎖がのたうつ独特の音が、あたりを取り囲むようにして広がりを見せた。

逃げ場などないと。逃がしはしないと。取り囲む音の包囲網は、無言にして雄弁に語る。

両足を広げ、両腕を広げ。ゆっくりと、徐々に徐々に身を低くしながら、空の両手でキツクナニカを握り込む。

美しい口端から、たたり、とゆっくり赤黒い粘液が一筋落ちる。いくつかの血が滴る。ライダーは、ピチャ……と粘着質な水音を立て、自らの血を長い舌で舐めとる。

粛々と、淫らな声を風に乗せ、囁いた。

「その血肉を差し出し、私の神殿の糧にでもなっ
て果てなさい」

慎二は自宅に向かってひたすらに走っていた。

夜とはいえ、人通りが途絶えてはいない。帰宅途中の学生やサラリーマンが、幾人かちらほらという程度はいる。

彼らは、端正な顔を必死の色に塗りつぶして全力疾走する少年を見ると、慎二が傍を通り過ぎると、誰もがギョツとした。

奇異の目を向けたり、呆気に取られたりするのであった。

「なにおまえら。誰の許可を得て僕にガン飛ばしてんだよ、ああ？」

と、普段の慎二ならそんな周りに難癖つけたことだろう。だが、今の彼はそれどころではなかった。

急がないと。

彼の胸中を占めているのはそんな焦燥感だ。

急がないと、あのくそ爺に会わないと。

自分にはできないことができる、それは胸糞悪いこと筆舌に尽くせないが、あの老獪に頼り纏わるしかない。

急がないと、聖杯戦争に負けちまう……っ！！

窮地に陥った手駒を手元に戻すためには、致し方ないことゆえに、慎二は必死だった。

もつとも、慎二が頼ろうとしてる老人は老獪だから。だから慎二が必死で走っている様子もその状況になった経緯も、手駒の戦況も全て視て把握していた。

間桐邸、その地下室。

濁り腐った悪臭に満ちる、日の届かぬ暗室。

蠢く無数の影の上、奇怪に騒ぐ闇の中、当たり前のように、平然と彼は佇んでいた。

「ふむ」

聖杯の寄る辺に従い、現代で殺し合うために参じた存在が2つ。
古の伝説に名を残す英雄が2人、騎兵と槍兵の英霊。サーヴァント
両者の戦いは容易に人智を凌駕し、人外魔境の戦地を造りだして
いる。

されど、それも彼にとっては、味方の人外を期待外れと断定する
には十分な、そんな造りモノに過ぎないらしい。

手に持つ杖に体を傾けて、小柄な体躯をやや丸める。窪んだ眼腔
の奥のギラつきを目蓋に閉ざした。
彼、間桐臓硯は、使い魔から得る戦況報告に、諦念を覚え、少し
ばかり肩を落とす。

「この程度か。十全な魔力があればまた違つのであろうが……
ふむ」

臓硯は過去五度に渡る聖杯戦争を、200年前から全て見てきた。
それも他者の生き血を啜り命を吸収しながら、正しく妖怪の如き所
業を数え切れぬほど繰り返してまで。

それはただ、万能の願望器を手中に勝ち取るために。

何百年と変わらず抱き続けた望み。もはや妄執に墜ちていようと
も、それを叶えるため、成就させるためと、怨念の如き執念を抱く
臓硯の、その戦略眼に曇りはない。

洞察力や経験論から、臓硯は、ライダーが聖杯戦争を勝ち残るこ
とはできない、と見定めていた。

「手を尽くしたところで勝ち残れるかは不鮮明。
アレが如何に屈指の化け物であろうと、やはり
せなんだ」
賭けるに値

臓硯は、孫が喚び出した英霊サーヴァントの性能を見抜いている。しかしそれは優れた魔術師がいて初めて真価を発揮できるといふものであり、碌な魔力供給源を確保できない状態は如何ほどの脅威も揮えない。

宝の持ち腐れも同然であれば、つまり腐った宝など不要。

「やれやれ……」

だが、かといって見捨てるのも早期に過ぎるであろう、聖杯戦争はまだ序幕の内にある。開幕の緞帳が上がる前に消されては、舞台の壮大さに陰りが浮かぶ。

始まりから欠員を出すなど、それがまさか、既に零落してると言えど、間桐の家が初の脱落者となるなど恥の極み。

そのようなことあってはならない、間桐の沽券に深く関わる事柄である。

やれやれと、臓硯はかぶりを振った。
ギチギチギチギチ、影が鳴いて、蠢いた。

「ハ、アアアア

ッ!」

業火と滾る憤怒と覇気の籠った、ライダーの咆哮。

ランサーの肌にシビれを与え、何かの予兆にゾクリと鳥肌を湧かせる。その直前。

あちらこちらから木々の軋む悲鳴が上がる。突然の異変に、ランサーが目を凝らすまでもなく元凶が姿を現す。

ランサーが視線を散らせば、その異様な光景は幾らでも目に入っ
た。。

辺り一面見渡す限りに張り巡らされ、月明かりの下、鈍色に光る
ソレは蜘蛛の巣のようであった。

「鎖、……ッ!」

幾重にも幾重にも、見える木々全てに鎖が巻きついていて異様な
光景。それにハツとしたランサーがライダーの手元を凝視する。

いつの間にもである。

そこには、空だった両手には、ランサーが取るに足らないとした
武器があった。

杭のような短刀。端に鎖の付いた奇妙な武器。それが2つ、林の
木々へと、どこまでも続く鎖を伸ばしているのであった。

その杭を両手に1つずつ握りしめるライダーの姿。
左右に大きく広げる白魚のようだった両腕は、杭を握り碎きそう
な迫力がある。それぐらいに、何倍にも膨れ上がっていた。

ライダーは杭の端から果てしなく伸びた鎖を、口から血を垂らし
ながら、血飛沫混じりの咆哮を張り上げて、あらん限りの力で引
ていたのだ。英雄には不相応な、怪物にこそ相応しい『怪力』のス
キルを用いて。

「アアアア

ッ!」

ライダーは臂力を何倍にも倍加させ、空へと聳^{そび}える木々を地に引
きずり落とさんとしていた。

そうして。チツと舌打ちしたランサーが動く、その寸前。

ライダーは勢いよく、膨れ上がった両腕を振り抜いて。 蜘蛛
の巣で木々を絞め砕いた。

絞めつける形を崩した、螺旋状に広がる鎖。幾多の木々を絞め折
った様は蜘蛛の巣よりも、大蛇のトグロを思わせた。

鎖のトグロは倒木の雨を呑みこんで、その中心に位置するランサ
ーを巻きこもうと蠢きうねる。

前後左右を覆い尽くした包囲攻撃。畜生一匹逃れる穴など無い蛇
のトグロが迫る中、ランサーはまるで動じない。

トグロの包囲網に逃げ場はない。地上には、であるが。

穴があるのはランサーから10数メートルは遥か頭上のみであり、

それは空を翔ける羽がなければ潜ることは不可能。

「ほ、っ」

もつとも、可能不可能の話は、ただの人間に限った話。超人たる英霊には当てはまらない。

跳躍し、ランサーは包囲網の穴を潜る。一瞬で、高々と跳んで事も無げに包囲攻撃を避けた。

直後。

そんなことは見越していたと、大質量の、倒木の投擲による追撃が為される。

ランサー 大気を引き千切りながら、半秒と経たず、林上空の、闇夜にある目標を寸分違わず捉えんとする、剛速球ならぬ剛速木。

空中という、身動き出来ぬ窮地であるうにランサーの表情に陰りはない。1つ鼻を鳴らして躊躇なく、剛と正面にまで迫った投擲物を足蹴にする。

彼には、空を翔ける羽はなくとも、空とて駆ける脚があった。

1度目の跳躍よりも更なる空へと駆け昇ったランサーはすかさず、紅い槍を、紅い光を振りかぶる。意表を突かれ、槍に籠めた魔力は十全には程遠いが、然れども、槍の真価に頼り切ることはない。投擲には百発百中の自信があるし、この槍も不完全とはいえ城壁を抜くに事足りる魔力はある、と。

そうランサーは確信して槍に、次の一撃に極限まで意識を集中させたのであった。

とどのつまり、最大の一撃に意識を割いて、無防備をさらけ出し

ていたのである。

「何を狙うおつもりで？」

そんなところに、すぐ下から、冷たい声が静かに水を差した。剛と投擲された倒木を事も無げに、ランサーが足蹴にして更なる空へと跳躍できるなら。ライダーは投擲したモノに杭を突き刺して追隨し、ランサーへと接近する手段に変えられた。

「
！？」

足首に巻きつく、ジャラリとした冷氣。

冷たい嘲りに、足首の違和感に、ランサーが振り向く間も与えず。

「墜ちなさい、ランサー」

「アッ！！」

吐血の飛沫を吐き散らしながら、修羅の如き形相を浮かべたライダー。その巨大な気合からの叫びを叩きつけられ、ランサーは夜の林へと真つ逆様に投げ落とされた。

高度からの強制急降下。無抵抗に落ちれば如何に英霊と言えどもただでは済まない。

あまりの失態に、ライダーの手際の良さに零れそつな言葉を飲み込み。ランサーは地上すれすれで体勢を整え、轟音を上げて着地した。

この瞬間。ランサーが気付かないほど微量な魔力が消え、蛇のトグロが立ち消えていた。

「？ あん？ うげ」

地面から空を見上げる間もなく。そこに差す、暗がり塗りを暗闇の影。なんだこりゃ、とランサーが魔力など欠片も感じない不思議現象に、呆けた声を零して視線を動かす直前。彼は不思議の原因に思い至って、もはや間に合わないと判断。万事休すと引き攣った顔で、げんなりして身構える。

「悪辣だなちくしょうがああつ！！」

せめてもの悪あがきとばかりのランサーの悲鳴じみた悪態は、殺到する木々の雨が飲みこむのであった。

「悪辣、ですか。」

ええ、その罵倒はまったく的を射ている」

木々の雨音が余韻を残す。土煙りが濛々と夜の林に立ち込める。ボタボタボタ血を落とすつつ、ランサー同様に丁度先ほど同じ位置に、ライダーもまた戻ってきた。

口の端から滂沱と血を流し、両腕からも出血が見られる。特に右

腕は酷使したのか、肘の骨が僅かに覗く傷は深い。

「……っ」

ライダーは口をキツク引き結んだ。意地による攻勢は後先を考えない特攻、下策に過ぎる無様な一手だった、と。

実に苦々しい状態だ。

魔力があれば問題ない状態だ。が、しかし魔力がないからこそ大問題なのだ。

今のままでは英霊^{サーヴァント}としての自動修復機能も魔力を枯渇化させかねない。もはや、これ以上の戦闘行為は不可能である。

それくらいに、余力が残っていなかった。

「う、っとおしいっ！」

苛立ちを孕んだ咆哮。

土煙りが吹き飛び、折り重なる木々が木片と化す。

何トンとあつたことだろう幾多の倒木を、ランサーはモノともしていなかった。

木々の雨を受けながらまるで無事なランサーに、ライダーは平然^{サーヴァント}としている。英霊がこの程度で倒れる訳がないのだから。

だからこうも、殺しあぐね、ついには打つ手が限りなく薄らいでしまつまで、苦戦しているのである。可能性として、理由としても一つ、ランサーの耐久力が逸脱している原因に“生き汚い”なに

かを感じさせる技能スキルの存在があるかもしれないが。
なんにしても、打開策が浮かばない。

一方ランサーは、苛立ちの念など掻き消し、戦いの終幕に向け、意識を研ぎ澄ませていた。

最初から現在まで、自分の思い通りに事が運ぶ気がしない。格下ならともかく、戦闘においてほぼ同じ次元にいる英霊サーヴァントが相手なら仕方がないのかもしれないが。

それにしてもだ。
攻撃を入れられた時。投げられた時、蹴りを受けた時、落とされた時を思い出せば。意識を集約させた瞬間の、ほんの僅かな隙を狙い済ます手口だった。

それらは掠め手であり姑息である。　　が、このエリンの英傑相手に尽く成功させるライダーの手腕は見事に過ぎる。思えば、出会う頭に林こに逃げ込んだのも有利な地形で戦うためであったのだ。

ますますもって心が震えた。

どこの、いかなる英傑なのか気にはなるが、聞いて欲しくない事柄のようだし、戦い方からして真つ当な英傑ではないのかもしれない。ならば、死に行く者の名など気にはしまい。

必殺の確信に力が漲る。

意識を研ぎ澄ませた時こそが最も危険な瞬間。ゆえにランサーは警戒していたが、一向に襲撃の気配が訪れない。

これは罠だということも考えられない。ライダーの見てくれから、

脆弱に過ぎる魔力の気配から、ランサーは確実な勝利を予見していた。

「
」

倒木地帯の中心に壮健を見せ、紅い槍から、全身から戦意を滾らせるランサー。

この状態でどのようにして槍を捌くか、この状況を脱するかを思案するライダー。

一触発の物々しい雰囲気の中、同時に、両者はともに目を見張る。

「！ チツ、何だコイツら!?!」

「あれは……」

勝敗を決する雰囲気は途端に中断の色を滲ませ、気色悪い雰囲気に染め上がった。

『キイギイキイキイキイキイキイキイキイキイ』

『!?!』

染め上げたのは、鼓膜を塗り潰す奇声。

それは拳ほどの小さな影から。無数に蠢く、小さな影達からだった。

『ギキキキキイイ』

『!!』

数え切れない小さな影が、奇声の、数え切れない連鎖を繰り返し、途切れることなく泣き叫ぶ。

暗がりには、小さな影は絶えず奇声を上げながら湧き出てくる。

ランサーの周りに、雨上がりの水溜りのように、溜まった倒木の陰から。陰という陰から、いくつもいくつも湧き出てくる。

その動きは、統率され、砂糖に群がる蟻の如く。

「ぬう……!!？」

影達はランサーに向かって群がり出した。

足下から頭上から背後から正面から横手から死角から、ありとあらゆる方向から飛び掛かる無数の影の群れ。

ランサーは視界を覆う影から、鋭い光を、口らしき箇所から微小の牙を見咎め、紅い槍を唸らせた。

旋風が吹き荒れる。

再臨した、ライダーを追い詰めた紅い嵐。

触れれば触れた傍から、その者の血肉を撒き散らす刃の嵐に、しかし影は恐れを知らぬと猛進する。

ただただ飛び込んで刃に四散し、緑色の体液を飛び散らせるのだった。

「……………」

虫けらが次々と払われる、一方的な蹂躪。

ライダーは無言だった。なぜなら知っていたからだ、あれらは老獺の手助けであると。

ランサーを襲う無数の影は、無数の蟲。蟲術^{じゅうじゆつ}を得意とする味方の援護によるものであった。

無言で、ライダーは夜陰へと身を溶け込ませる。まるで、最初からそこには誰もいなかったかのように。

消えゆくその表情に窮地を逃れたという安堵もなく、助力に微笑みを浮かべることもない。無表情に、無感動に消えていく。

それでも。

ライダーのその能面には、底知れない怒気が滲んでいるようだった。

「お？」

ランサーを襲う影が一斉に引く。

理由に見当のつかないランサーは、ライダーの気配が微塵も感じられないことに気付くと察したのだった。やはりライダー相手に意識を砥ぐと、碌なことにならないらしい、と。

いや、戦うこと自体が厄介事の引き金らしい。

周りには、表の世間一般的に、あまりにも不自然な光景が横たわっている。

「あーあ」

己がマスターの都合上、こういった日常における異常を見過ごすことを許されない。

頭痛が痛いと言ったランサーは、しばし不貞腐れるのだった。

ちなみに。

ランサーが林の復旧を終えたのは、夜の帳が上がる頃であった。それまで。グチグチグチグチ慎二に愚痴られていたライダーのように、遠く離れたマスターから思念通話によって、くどくどくどくどと嫌味を言われ続けたランサーの不運値はAランクであろう。

開幕の夜

夜が白み、煌々と輝く太陽が昇る。

ライダー ランサー
騎兵と槍兵の、余人に知れぬ争いが一端の幕を閉じた。

幕間が始まる。

それから、開けて明朝。時は足を止めずひたすらに歩みを進め、日に茜が射し出す。それよりもしばし前の頃。

穂群原学園、弓道場。

そこには放課後の部活動に励む学生がいるが。部活動という、学業の一環のための誠実な場所に不似合いな、不誠実な、嘲りが呵呵大笑と響く。

「あははははっ！ まーた外してるよ！

おいおいおいおい、そんなんでよく弓道部に来れたなお前ら！
ボクなら恥ずかしくて死んじゃうよ！ なーみんなあ

「ほんとほんと、先輩の言うとおりですよー！」

「うーわあ、あんなんで弓道やってるつもりなんだあ。ぶっ」

「もー、あんなのと一緒にいたら私たちの腕前も落っこっちゃいますよー、慎二先輩」

慎二とその取り巻きの女生徒達の前で、一年生の男子部員は全員弓を持たされ、ひたすらに射を強要されていた。副部長である慎二

の命令で、だ。

本来ならこんなことを許さない部長や顧問は、間が悪いことに居合わせていない。しばらく出かけるという旨を部員全員が知っていた。

2年生や3年生の男子部員も、女子相手に極めて弁が立つ慎二を敵に回すとどうなるかは想像に難くないため、気の毒そうな顔をすればかりである。

以前、普段から誰に対しても高圧的な慎二に、いよいよ腹を据え兼ねた生徒が「調子に乗るな」と脅したことがある。

翌日。慎二を脅した男子生徒は、多数の女子生徒から、バケツで水を被せられ、授業中に当てられた問題に答えられない時や体育の授業で失敗した時に高々と嘲笑された。

そんな嫌がらせは学校だけに止まらず、家にまで、果ては生活圏にまで及ぶ。結局その男子生徒は不登校になり、転校まで追い込まれたのだ。

かつてのそれを知るゆえに学校の男子生徒は皆、間桐慎二を敵に回すな、という共通意識があった。

「しっかり狙えよ、下手糞共ーっ！ くっ、あはははは！」

『『あははははー！』』

1年生の男子部員にとって、いつ終わるとも知れぬ羞恥地獄である。

“……………”

慎二の背後。霊体と化し、不可視となって控えるライダー。彼女は目前の憐れを誘う光景に、しかし一瞬も意識を割くことはない。

慎二がしていることは昨夜の鬱憤晴らし。そんなものに意識を割く余裕など、ライダーにはない。

臓腑を潰されたまま行つた特攻の代償は、夜中に徘徊して一般人から精気を篡奪することで、反動による傷はとうに癒えた、骨が覗く腕の傷すらもだ。

だが。

“っ。完全、ではありませんが。……………不治の傷ですか”

苛烈な紅い嵐。

槍の連舞を避けても避けても、槍が放つ烈風までは避け切れず、掠り傷を避けられず、結果として、幾つもの細かな傷を受けた。

烈風による傷はたちまちに癒えたのだ。が、槍が掠めた傷は一晚経つてなお、未だに傷跡が残っている。

癒える兆しとしてほんの僅かに痛みは薄れているが、その程度だ。不治の傷ではなからうが、それに準ずる傷であることに間違いない。しかし厄介だった。

超越的な槍捌きに、遅癒の傷を残す呪いの槍。

厄介な組み合わせであり、同時に、ライダーにとって忌々しい事
この上ない因縁を覚えさせる武器。

慎二ではないが、ライダーとしても沸々と湧く鬱憤を晴らす機会
が欲しかったのである。

それからようやくして、慎二曰く、“1年生への扱き”が終わる。
ささやかな歓声を以て出迎えられ、部長と顧問が登場したのだ。

弓道場での小さな騒動。

2人から延々と注意されても反省の色を見せない慎二に、しばらく
の間、弓道場の掃除が言い渡される形で一端は終息し、弓道部、
1年生の男子部員が総退部することで、それは幕を閉じたのだった。

決して、平和で長閑で何事もない、とは取れないが。
されども。

幕間の如く、日常は終わった。代わって、非日常の幕が上がった。

時計は指針を巡らせ何事もなく指し示すは、夜の刻限。

開幕の夜

学園裏の林。夜闇が大きく深まり、夕陽を呑みこんだ時刻。整然とした林の中、ランサーは木に寄りかかっていた。

夕闇になり出した頃から、心も身体も滾るように熱い。

それは逸る戦意のせい。

いまにも暴れたいと訴える魂を静めようと、ランサーはひたすらに瞑想を続ける。

来るべき戦いに備えるため。

目を瞑るランサーは、ふと遠く校舎に、屋上に知らない気配を感じて目を開けた。

アーチャーサーヴァント

しかしどう目を凝らしても、この暗がりでは、弓の英霊のように『鷹の眼』があるわけでもないし、待ち人のようにもできないのは、気配の主を捕えられない。

だが、其処に確かな予感を見出した。昨日とは違った戦いがある、と。

確信と共に、目覚めるように戦意を解き放つ。身体の熱は滾り、心は踊り出した。

戦いの気配に、ランサーの顔に喜々とした笑みが浮かんだ。

恐れを知らぬ足が動く。疾風を伴い駆ける足取りは、もはや風よりも軽かった。

まだ見ぬ戦いを求めて、ランサーは心躍る匂いがする方へと、戦意を漲らせて進んでいく。

そうして。

ランサーが対峙するは、奇妙なまでに気に食わない男だった。

開幕の夜（後書き）

おまけです。3つ目につなげると長くなりそうだったんで、なんか微妙に長くなったが、書きたいの書けて満足満足。

読んで下さってありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9132u/>

狼煙の一戦

2011年10月7日00時27分発行